2011年11月27日　西福岡教会説教　　中川憲次

題：　　「『今』という宝物」

聖書箇所：　コリントの信徒への手紙一　**5章5節—10節**

「ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。」

今お読みしたのは、パウロという初期キリスト教の伝道者の言葉です。パウロは復活のキリストに出会う前は、クリスチャン達を迫害していました。その彼が、ダマスコという所に向かう途上で復活のイエス・キリストに出会ったために、イエス・キリストの福音をのべ伝える身となったのです。イエス・キリストの弟子はたくさんいました。そしてパウロは、その弟子たちの中で最も華々しい働きをした人といってよいでしょう。しかしイエス・キリストの福音の素晴らしさは、華々しい働きをしたかどうかにはかかっていません。それぞれが神から与えられた分に応じて働けばそれでよいのです。もちろんそのことをパウロはよく分かっていたからこそ、「神の恵みによって今日のわたしがあるのです」と言うことができたのでしょう。パウロは復活のイエス・キリストと出会ったあの時だけでなく、それから何年もたったこの時にも、自分が神の恵みによってのみ生かされているということを、よく知っていたのです。パウロはしみじみと自分の過去を振り返り、今更のごとく今の自分の有様を見て感謝しているのでしょう。このパウロの感慨は私の感慨でもあります。もちろん私はパウロのように華々しい働きはできていません。昨今はましになりましたが、大学の礼拝で私語が多かった時がありました。その頃、私はそのような大学の礼拝に出る度に、あの兵庫県の田舎の教会の人々が教会にとどまるようにと仰るのを振り切って福岡女学院に来たのは、こんな私語をするような態度の悪い人々と時を過ごすためではなかったはずだと思ったりする日々が続いておりました。私の宗教主事、すなわち牧師としての日々は情けないことになっておりました。しかし、そうであればこそ、そんな惨めな私を神が生かしてくださり、その場でなおも働かせ続けてくださっていることに感謝するほかありませんでした。私にとっても、正にあの日々のあの時々が、「神の恵みによって今日のわたしがあるのです」と告白すべき時々でした。

ところで、「神の恵みによって今日のわたしがあるのです」と訳されている言葉は、英語では「**by the grace of God I am what I am**（＝**χάριτι δὲ θεοῦ εἰμι ὅ εἰμι**）」と訳されており、ギリシャ語の原文に忠実です。ですから、直訳風に訳しますと、「神の恵みによって私は、今あるところの私であるのです」とでもなるでしょうか。それにしても、ギリシャ語の原文にも、英訳にも「今」という言葉は直接には出てきません。しかし、過去でも未来でもない、今ここに自分が存在していることが神の恵みだと、私も告白せざるを得ません。

ところで、かつてこんな話を聴きました。それは聖書を無料でいろいろの人々に配布しているギデオン協会の人が福岡女学院教会に来て話された時のことです。その人はギデオン協会の働きを語る中で、ある牧師の証しを紹介されたのですが、それはこういうものでした。その牧師は中学生か高校生の時、ギデオンの聖書が配られているのに出会いました。彼は聖書をもらいましたが、彼と一緒にいた友人は受け取らなかったそうです。そして、受け取った彼は牧師になり、受け取らなかった友人は殺人事件を犯して犯罪者となったと

いうのです。それが、紹介された牧師の証しでした。まるで、ギデオン協会が配っている聖書を受け取らなかったから天罰が下ったとでも言いたげな口ぶりでした。私は、それは実に薄っぺらい人生の把握だと思いました。殺人犯は立派でなくて、牧師は立派でしょうか。イエス・キリストを信じたら絶対に殺人を犯さないと、誰が断言できるでしょうか。あのボンフェッファーは、ユダヤ人が虐殺され続ける極限状況において、ヒトラー暗殺も止むを得ないと考えたのでした。一体誰が、あの折のボンフェッファーを責めることができるでしょうか。

さて、そこで、イエス・キリストに出会って救われた人間は、イエス・キリストに出会わない人を残念な存在と断定すべきではありません。そして、イエス・キリストに出会って救われた人間の目は、イエス・キリストと出会っていない他者との比較して、素晴らしい自分の有様に向けられるべきではありません。過去の自分と現在の自分を比べて、今の自分は素晴らしいなどと悦に入っている場合でもありません。イエス・キリストに出会った人の目は、ただただ神の恵みに向けられるべきです。

神様は何処にいらっしゃるのでしょうか。神様は、私たちの今の実感の中にいらっしゃいます。いや、今の実感そのものが神様だとも言えるのではないでしょうか。

私たちの宝物はなんでしょうか。過去の業績でしょうか。それとも未来の希望でしょうか。確かに、今を実感できない時、私にとって、過去や未来が宝です。しかし、私たちは今ここで生かされて礼拝の場に存在しています。この私たちの今が私たちのかけがえのない宝物です。死ぬまで、この今という宝物が連続するのです。何というあり難いことでしょうか。あなたはあなたがいつか死ぬことを実感しておいででしょうか。そうであったら、今のあなたがここにこうして存在していることが、神の恵み以外の何ものでもないことを実感なさるに違いありません。

最後に、本日のパウロの言葉をもう一度読んで終わります。

「神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。」

祈り

神様、私たちを今ここでこうして存在せしめてくださいますことを感謝致します。この祈り、主イエス・キリストの御名によって御前にお捧げ致します。